『軽トラ市 K mobile-market まちが活きる可動商店街』で読む、新しいコミュニティの可能性

公益財団法人中部圏社会経済研究所 企画調査部長　　松田　直己

『中部圏研究』Vol.225（2023年12月刊行）の「閑話室」において、「『東三河視察会』で感じた地域の『熱』」と題して、当財団役職員による視察レポートをお届けし、その中で愛知県新城市の月例の軽トラ市「のんほいルロット」の盛況ぶりをお伝えしたが、今年４月に**『軽トラ市 K mobile-market まちが活きる可動商店街』**という本が刊行され、その「熱」、すなわち地域活性化の要諦がまとめられていたので、本稿にて少しご紹介したい。

本書は、「軽トラ市」をテーマとし、愛知大学戸田敏行教授を中心とする三遠南信地域連携研究センター、地域政策学部の戸田ゼミナールの研究成果を紹介する２・４章、三遠南信地域をお膝元とするスズキ株式会社の鈴木修相談役や自動車工業会軽自動車委員会代表のインタビュー、軽トラ市運営者のまちづくり記録からなる１・３・５章、そして軽トラ市の運営マニュアル、全国の主要軽トラ市のリストも納められた実践的な内容となっている。

タイトルに「可動商店街」とあるように、人口やコミュニティの縮減がみられる現状において、従来のような固定的なコミュニティに「軽トラ市」のような可動的な要素を取り入れることにより、地域の人と人が、あるいは外からの（たとえば軽トラで商品を提供する、あるいは軽トラ市に訪れる）人とのつながりが生まれてくる仕掛けや考え方が、この本には満載されている。

そしてこの本において注目すべきなのは、ものづくり企業としての軽自動車メーカーが、しっかり将来社会、また地域住民を温かい目で見据えて軽トラ市に参画していることである。本の冒頭には、鈴木修相談役のインタビューが掲載されているが、「ものづくり」の経営者の目線が自らが作る軽自動車を通じて地域の人々に向かっているさまが活き活きと伝わってくるものであり、「ものづくり」が盛んな中部圏での、地域づくりに向けた可能性についても心を広げてくれる読み物となっている。そこには、人と車と街が一体で新たなコミュニティを形成する社会の姿が映し出されている。現に、2024年３月には「のんほいルロット」の会場に接する場所に株式会社スズキ自販東海の新城支店がオープンし、「のんほいルロット」開催時には一般開放されるなどコミュニティの場を提供するとのことである。

また、軽トラが移動してコミュニティを創ることや、軽トラ市同士がネットワークを形成していることは（全国軽トラ市も開催されている）、関係人口の創出という視点にもつながると考えられる。

さらに、地方都市ではなかなか商店街に人が回遊しないといわれている中、「のんほいルロット」の場合、定期的に行く人が多いことや、「のんほいルロット」が商店街内で開催されており、一見して商店街の出番が減りそうに思えるのに反し、商店街の活気にもつながっていることなど、意外な気付きにもたくさん出会える本となっている。

現在、人口減少社会の中においては、「スマートリージョン」の視点から、「デジタルとリアルの融合」が国が示す国土形成計画でも言われているが、そのリアルの中にも「固定」と「可動」を上手にミックスさせていくことで新たなコミュニティの可能性に触れることができる。また、本書にも少し触れられているが、今年元日に発生した能登半島地震で災害時のコミュニティ維持の大変さがメディアを通して伝わってくる中、軽トラ市（可動商店街）をどう活用するかの試行錯誤は必要でありながらも、災害時における、そして被災

地域の復興時における可動社会の可能性に思いを
はせてみるのもいかがだろうか。
　ぜひお手元に取っていただき、ご一読をお勧め
したい。

＜書籍紹介＞

『軽トラ市 K mobile-market まちが活きる可動商店街』
（愛知大学三遠南信地域連携研究センター 監修　戸田敏行 編著、交文社 2024）
ISBN978-4-910678-11-5